

## 礼拝のしおり (2021年1月号)

～主の御前に一つにされて～

悩みの日にわたしを呼べ、  
わたしはあなたを助け、  
あなたはわたしをあがめるであろう。

(口語訳 詩篇 50 篇 15 節)



教会の花壇には、寒さにも負けず、シクラメンの花が咲き誇っています。

主の聖名を讃美します。  
新しい主の年 2021 年が始まりました。新型コロナウイルスの感染拡大はとどまることなく一層厳しさを増しています。その予想を超える勢いに、誰もが驚きの思いを禁じ得ないのではないのでしょうか。

私たちにできることと言えば、それは新たな年を迎えても変わることなく、こまめに手洗いをすることや、外出する時には絶えずマスクをし、人ごみをできるだけ避けることぐらいです。しかし、驚くほど日に日に増えていく感染者数を目の前にすると、もはや私たちがなすことによっては押しとどめることができないものを感じさせられて、打ちのめされるような思いにすらなります。そして、改めて、私たち人間という存在の小ささ、またその無力ということをおれなく覚えるのです。

そのような中で、東京都内のある教会に 40 年を超えて仕えてこられた、90 歳というご高齢のカトリック教会の司祭を取材したテレビ番組を見る機会がありました。昨年の春から外出することがほとんど出来ず、教会内の一室で一日のほとんどの時間を過ごしてこられたその司祭が、こういう言葉を語られていました。「コロナを通して人間に教えられた教訓がしっかりと見出されて、その教訓のもとに新しい生き方というものを人間が見つげ出さなければいけないんじゃないか。少なくとも謙虚に、人間が自分の傲慢さに気がついて、そして改めてもう一度出直そうということから何かが見えてくるんじゃないかな、と」。その言葉と共に、私が心打たれたのは、その 90 歳の司祭が、続けてこのように言われたことでした。「僕も傲慢の極みにいますので、まだ何も見えないんです」。

司祭となって半世紀以上、そして一つの教会で 40 年を超えて仕え、歩んでこられた 90 歳を超えるその方が、人間が自分の傲慢さに気づくこと、そしてそこからもう一度出直そうとすることから何かが見えてくるのではないかと語る。そこで語られる「人間の傲慢さ」とは、誰か他の人のものというばかりなく、その極みにいる者として何よりも自分自身を見ている。その姿に、私は何か頭をゴンと殴られたような思いにさせられたのでした。

自分の傲慢さに気づき、そこからもう一度出直そう。そこで、ふと私の心に浮かんできたのが、上記の詩編第 50 編の一節です。「悩みの日にわたしを呼べ、わたしはあなたを助け、あなたはわたしをあがめるであろう」。

どこかで自分の力を過信し、自分の力に頼って生きようとしていた自らの傲慢さに気づく時、信仰者が立ち帰るべきところは、神の呼びかけを聞いて、神を仰ぎ、その御名を呼ぶことなのではないのでしょうか。御言葉に聞き、祈る。当然のこのように思われるそのところから、新たな思いをもっともう一度出直していく。きっとそこにおいてこそ、新たに見出されてくるものがあるに違いない。そう思われています。

◎1月17日以降の主日礼拝の予定

礼拝の予定	聖書・説教題	交読文	讃美歌 21
1月17日(日)	エゼキエル書 36章 22～28節 マタイによる福音書 12章 9～21節 「まことの救い主に望みをかけて」	詩編 46編	37, 51, 531, 28
1月24日(日)	イザヤ書 49章 22～26節 マタイによる福音書 12章 22～32節 「神の国のおとずれを知るならば」	詩編 64編	12, 356, 346, 29
1月31日(日)	イザヤ書 55章 1～7節 マタイによる福音書 12章 33～37節 「つまらない言葉を捨てて歩もう」	詩編 51編	3, 58, 529, 27
2月7日(日)	ヨナ書 2章 1～11節 マタイによる福音書 12章 38～45節 「真実のしるし」	詩編 16編	18, 13, 475, 26
2月14日(日)	詩編 1編 1～6節 マタイによる福音書 12章 46～50節 「主イエスの家族となる幸い」	詩編 27編	351, 309, 402, 27

☆1月17日～2月14日の主日礼拝、その他について（お読みください）

新型コロナウイルスの感染防止を考慮しつつ、1月17日～2月14日の高井戸教会の主日礼拝、その他の諸集会については、以下のとおりといたします。

◎主日礼拝について

11月半ば頃から新型コロナウイルスの感染が急速に拡大してきたことを受けて、11月22日以降、主日の礼拝は、午前10時30分からの1回のみとし、礼拝堂では牧師と礼拝で役割を担う長老のみで捧げることとして現在に至っています。1月第2週には、2千人を超える新規感染者数の日が続くこととなり、当面の間、主日礼拝に関して礼拝堂に集うことを制限している現在の対応を継続していくこととなります。みなさまには、なお引き続き忍耐をしていただくこととなりますが、どうぞご理解の上、ご自宅で祈りを捧げていただきたくお願いいたします。

今後も、「礼拝のしおり」の発行を継続します。また、主日礼拝における説教の動画も、引き続き教会ホームページから見られるようにいたします。

そして、感染が再び収束に向かい始めた折りには、いずれかの時点で、感染防止を考慮しつつ礼拝堂に集っていただくことができるようにいたします。その際には、教会の連絡網ならびにホームページを通してお伝えするようにいたします。

◎子どもの教会、その他の諸集会について

子どもの教会は、幼小科は現在休止中です。中高科は毎月1回のリモートでの礼拝と交わりを行っています。

また、1月も多くの集会は中止となる見込みです。現在、オンラインで集会等を開催すべく検討しています。開催されることになった折りには、週報等でご案内するようにいたします。

**「闇に打ち勝つ光を見つめて」（ヨハネ1章5節、14節）牧師 七條真明**

「光は暗闇の中で輝いている」。新約聖書に収められているヨハネによる福音書は、独特な仕方で語り始めるその冒頭部分において、短く、しかし印象深い言葉で、クリスマスに訪れた光について語っています。闇の中に光が輝き続けている。この2020年、クリスマスを迎えている私たちに、聖書の御言葉は語りかけます。

ヨハネによる福音書は、その冒頭で、「初めに言があった」と不思議な仕方で語り始めます。そこで「言（ことば）」とヨハネ福音書が言い表す御方、神ご自身にほかならない神の御子が、暗闇の中で輝き続ける光として、私たちが生きるこの世界に来てくださった救い主です。

しかし、ヨハネ福音書は、「光は暗闇の中で輝いている」と語った後、すぐ続けてこう語ります。「暗闇は光を理解しなかった」。クリスマスの夜、この世を照らす光として来てくださった救い主イエス・キリスト、その御方の光を、暗闇は理解しなかった。この世を覆う闇は、私たち人間をも深く覆い、私たちの心の中までも深く覆っていたので、救い主が来られても、その御方の光を理解できなかった、と語るのです。

しかし、光なる救い主が、どのような仕方で、この世に来られたのかということに改めて考える時に、この世に生きる私たち人間には分からなかった。いやおよそ私たち人間の理解を超えた仕方で、救い主はこの世に来られた。だから理解できなかったと言ってもよいような仕方で、救い主は来られたことを改めて思います。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」。ヨハネ福音書が「言」と呼ぶ御方、永遠なる神の御子は、肉となって、私たちと同じ人間となって、この世に来られたのだと語られます。他の福音書が語るところで言えば、マリアという女性を母として、そのお腹に聖霊によって宿られ、月満ちてお生まれになった。それも、輝かしい王宮のような場所においてというではありません。臭くて汚い家畜小屋にお生まれになり、そして家畜の餌を入れる飼料桶に寝かされる赤ん坊として、救い主はこの世に来られたということです。輝かしい光などどこにも見出せないような場所に、そして肉となられた言である救い主ご自身の姿にも、その光が私たち人間にはどこにも見出せないような姿で、救い主はいらしたのです。

しかし、そうであるにもかかわらず、ヨハネ福音書はこう語るのです。「わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた」。その御方のうちに輝く光が見出されるものとなり、世界中にそのことが広がって、今では毎年12月のこの時に、光なる救い主が来られたことが、どのような時も覚えられ祝われてきたことは、実に不思議なことです。そして、暗い闇が世界中を覆っているこの2020年という年、この高井戸の地に立つ教会においても、灯りがともされ、クリスマスが祝われているのです。そのことは、救い主として来てくださった主イエス・キリストご自身の光が、まさに「光は暗闇の中で輝いている」。今この時も輝き続けている。この御方の光、その光が有している力そのものを証しているものなのではないでしょうか。

この「言」なる御方は、神の御子なのです。神の独り子が、肉となって、私たちと同じ人間となって来られた。貧しく低く降られ、赤子となって来てくださった。そこに現れている神の御業はどれほど大きな救いの力に溢れているか。そのことが、ここで言い表されているのだということを思われるのです。

私たちの誰もが、恐れと不安を抱き、絶えずどこかで緊張しながら生きてきた一年の日々があります。私は、この年、キリスト教会の信仰問答の一つであるハイデルベルク信仰問答の問1、「生きる時も、死ぬ時も、あなたのただ一つの慰めは何ですか」という問いを繰り返す心に思い起こすことになりました。そして、この自分が、イエス・キリストを信じて、洗礼の恵みに与らせていただいている。イエス・キリストにしっかりと捕らえていただいている。生きる時も、死ぬ時もそうだ、と語られるその強い慰めに支えられてきたのです。

いつも不思議に思いますが、「暗闇は光を理解しなかった」というヨハネ福音書第1章5節の後半部分は、「暗闇は光に勝てなかった」とも訳せることです。暗闇は光に勝てなかった。クリスマスに来られた救い主の光、肉となられた言、その御方の光は暗闇に打ち勝つ。打ち勝たれた光なのです。

「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」（ヨハネ16:33後半）。主イエスは、ご自身の十字架と復活の御業によって死に打ち勝ってください、暗闇に決して負けない、闇に打ち勝つ光として輝き続けていてくださる。深く私たちが憐れみ、支え続けていてくださる光として輝き続けているのです。